
シンポジウム・ミニシンポジウム

5月28日(土)

シンポジウム1 (9:00~11:30) オンラインB会場

トラフグ養殖研究の最前線 ~次世代のトラフグ生産を科学する~
企画責任者：吉川廣幸 (水産研究・教育機構 水産大学校)

シンポジウム2 (9:30~11:00) オンラインC会場

若手の会ミニシンポジウム：

ウィズコロナ時代のマリンバイオテクノロジー研究 ~志定まれば、気盛んなり~
企画責任者：前田義昌 (筑波大学・生命環境系)、
新家弘也 (関東学院大学・理工学部)

5月29日(日)

シンポジウム3 (14:30~17:00) オンラインA会場

DX革命とマリンバイオテクノロジーの将来

企画責任者：一般財団法人マリンオープンイノベーション機構
五條堀 孝 (研究所長)、橋本 正洋 (統括プロデューサー)

シンポジウム4 (14:30~17:00) オンラインB会場

生体微量元素・金属の研究最前線

企画責任者：山下倫明 (水産研究・教育機構 水産大学校)

トラフグ養殖研究の最前線 ～次世代のトラフグ生産を科学する～

5月28日(土) 9:00～11:30 B会場

企画責任者：吉川廣幸(水産研究・教育機構 水産大学校)

(プログラム)

9:00～9:05

趣旨説明

○吉川廣幸(水産研究・教育機構 水産大学校)

9:05～9:30

ゲノム選抜育種による優良系統の作出と生殖工学との融合による社会実装

○細谷将(東京大学大学院農学生命科学研究科附属水産実験所)

9:30～9:55

新しい品種改良技術によるトラフグ優良品種作出の取り組み

○吉浦康寿(福井県立大学 海洋生物資源学部)

9:55～10:05 休憩

10:05～10:30

ナノジーン育種(欠失型ゲノム編集技術)によって開発した22世紀ふぐの販売

○岸本謙太(リージョナルフィッシュ株式会社)

10:30～10:55

代理親魚技術によるトラフグ生産と遺伝資源の保存管理技術の開発

○吉川廣幸(水産研究・教育機構 水産大学校)

10:55～11:20

トラフグ免疫機構と魚病対策

○末武弘章(福井県立大学 海洋生物資源学部)

11:20～11:30

総合討論

若手の会ミニシンポジウム：
ウィズコロナ時代のマリンバイオテクノロジー研究
～志定まれば、気盛んなり～

5月28日（土） 9:30～11:00 C会場
企画責任者：前田義昌（筑波大学・生命環境系）
新家弘也（関東学院大学・理工学部）

（プログラム）

9:30～9:35

趣旨説明

○前田義昌（筑波大学）

9:35～10:00

養殖魚における選抜育種の歴史をゲノムから振り返る
～セミドライ研究者のコロナ禍～

○澤山英太郎（日本大学生物資源科学部）

10:00～10:25

コロナ禍での新規実験系の立ち上げ実例

○小祝敬一郎（東京海洋大学ゲノム科学研究室）

10:25～10:50

コロナ禍で再認識した、
微生物1細胞ゲノム解析におけるサンプル調製の重要性

○西川洋平（早稲田大学）

10:50～11:00

総合討論・質疑応答

新家弘也（関東学院大学）、前田義昌（筑波大学）

DX 革命とマリンバイオテクノロジーの将来

5月29日(日) 14:30~17:00 A会場

企画責任者：一般財団法人マリンオープンイノベーション機構
五條堀 孝(研究所長)、橋本 正洋(統括プロデューサー)

(プログラム)

14:30~14:40 開会挨拶・趣旨説明

○橋本 正洋

14:40~15:10 駿河湾DXとバイオテクノロジーへの活用

○五條堀 孝^{1,2,3}、齋藤禎一¹、西川洋平³、竹山春子³、橋本正洋^{1,4}
(1:マリンオープンイノベーション機構、2:KAUST、3:早稲田大学、4:法政大学)

15:10~15:40 海洋音響からみたマリンイノベーション~駿河湾を例として

○赤松 友成 (笹川平和財団海洋政策研究所)

15:40~16:10 駿河湾学のすすめ~地球生命科学からのアプローチ

○平 朝彦¹、齋藤寛²、坂本泉^{1,2}、馬場久典^{1,2}、横山由香^{1,2}
(1:東海大学海洋研究所、2:東海大学海洋学部)

16:10~16:55 パネルディスカッション

モデレーター 橋本 正洋 (マリンオープンイノベーション機構)

パネリスト 五條堀 孝 (マリンオープンイノベーション機構)

赤松 友成 (笹川平和財団海洋政策研究所)

平 朝彦 (東海大学海洋研究所)

竹山 春子 (早稲田大学理工学術院)

16:55~17:00 閉会挨拶

五條堀 孝 (マリンオープンイノベーション機構)

シンポジウム 4

生体微量元素・金属の研究最前線

5月29日（日） 14:30～17:00 B会場

企画責任者：山下倫明（水産研究・教育機構 水産大学校）

（概要）

最近の機器分析技術の著しい進歩によって微量元素を高感度に測定することができるようになった。生体由来のナノパーティクルの検出やシングルセルの分析など新しい研究手法を活用して微量元素の生体内・細胞内での役割が明らかにされつつある。生体微量元素・金属の研究分野からのマリンバイオテクノロジーへのアプローチを探る。

(プログラム)

1. 小椋康光

誘導結合プラズマ質量分析計を用いた単一細胞／単一粒子分析の生物学的及び毒性学的応用



2. 島村佳典・宮下和彦

Single particle ICP-MS 法による金属粒子の検出



3. 大谷宗資・山下倫明

魚類の脳に由来する鉄微粒子の検出—地磁気感覚への関与を探る



4. 松本衣里

HPLC-ICP-MS を用いた化学形態別ヒ素分析

